日本人学校での英語教育実践を通して

前リアド日本人学校　　教諭
岩内町立岩内第一中学校　教諭　中島次郎

１．はじめに

サウジアラビア王国の首都リヤド（Riyadh はリヤドと和訳されることが多いが日本人学校の名称はリアド日本人学校）は、近年、いわゆるオイルマネーにより、近年、急速に発展している近代都市である。その人口は 450 万人とも言われ、その成長ぶりから正確なところは誰も把握できないのではないかと思えた程だ。巨大なショッピングセンター、外国人居住区等の集合住宅やホテル等が次々と建設され、また人口増加に伴う様々なサービス業も成長しているため、その労働力として、近隣の中東諸国をはじめ、インドやパスタン、そして特に東南アジアから、リヤド市の人口の４割を占めるとも言われる外国人労働者が急激に流入、増加している。

サウジアラビアの公用語はアラビア語がそれとして定められているが、生活するにあたって、私たち外国人が使用する言語は、公用語のアラビア語よりも共通語としての英語が欠かすことができない。もちろん、アラビア語圏の人たち同士で話をするときにはアラビア語が使用され、アラビア語しか話せない人も少なくない。そのため、私たち派遣教員の生活を考えれば、家庭や職場で話す母国語（日本語）、生活で話す英語、親睦で話すアラビア語といった具合だ。

２．小学校における英語教育実践

リヤドで生活する日本人学校の児童・生徒にとって、英語に触れる機会は、間違いなく日常的に身の回りに存在し、授業としての英語を考えるとき、その位置付けは、ねらいというよりは必要・当然に近い。世界各地に展開している日本人学校小学部のカリキュラムに『英語』もしくは『英会話』の時間がない日本人学校はその性格上、皆無であると思われる。実際に英会話の授業を担当するということで迷ったことはその根底からである。『どう授業を展開していくか』ということである。

①設定した目標

これまでは、国内で中学生を対象に英語の授業を展開してきたわけだが、それは教科書があり、教えるべき項目（単語や文法）があり、それに沿ったテストがあり、最終的には高校入試があった。しかし、リアド日本人学校での対象は、日常的に英語を用いてコミュニケーションを行っている小学生であり（中学部も併設されているが、絶対数は小学部の方が多い）、教科書もなければ、教えるべき項目もない。そのような学習者を対象としてイメージし、赴任が決定してからの慌ただしくも時間の少ない中で心に決めたことは、

・興味・関心を失わないような言語活動する。
・扱う言語材料の年間を通した見通しを持つ。
・英語で極めて自然に簡単な表現ができる。

ということである。設定理由として、近い将来に導入される可能性が低くない小学校への英語教育導入を考えたとき、これらの目標も国内の小学生に当てはまると考えたからである。興味・関心を損なわず、見通しを持って、自然に英語を扱えるようにするという目標を立てた。年間の見通しということでは、手探りの状態であったが、試行錯誤し、実践してみた。

②英語の授業実践

実際に実践してみて、小学部の児童は、聴いて理解するという点、意思伝達も含め表現するという点ではレベルが高く、モチベーションも高い。参加態度も積極的である。ただ文字の扱いや文法という点ではルールを外れていることが多く、修正が必要であるが、間違うということを恐れている児童も少なくないので、修正もそこそこに、興味・感心を大切に授業展開した。以下の通りである。

１学期

・ フォニックス
・ 聞き取り
・ 身の回りの単語
・ 英語の歌

２学期

・ Be 動詞を用いた表現
・ 一般動詞を用いた表現
・ インタビューゲーム
・ 疑問詞、助動詞

３学期

・ 英文の読み
・ 簡単な自己表現

フォニックスについては、有効であったと思われる。『アルファベットには名前と音がある』というのは小学生にとって、漠然と分かっている児童もいたが、彼らのほんとんどは、いわゆるアルファベットの歌で『名前』は知っているが、それぞれが持っている『音』については頭の中でわかっていない児童が多い。というのは、日本語の平仮名は表音文字であり、日本語と英語の違いに気付くことで、文字と音の相互関係の理解が容易になる児童も少なくなかった。

聞き取りについては、児童の能力の高さに驚いた。まず、聞いてだいたいの意味は理解しているし、分からない単語があっても、知っている単語だけで意味を推測できる。そのあとで、どう答えていいのかは文法的にもばらばらで非文法な返答が多いが、これまで教えてきた中学生よりもその柔軟な耳に感心させられた。

英語の歌も１学期は毎月取り組んだが、結局は歌詞カードを配っても読むのも難しいので、音で覚えるという感じだった。が、英語独特のストレスやリンキング、落ちる音などをリズムの中で練習できる利点がある。ただ月毎というより、年間で取り扱う歌を決めて取り組みたいと感じた。

２学期に入り、意識させないで文法を取り扱うことに挑戦してみた。中学校では、前後を結びつけて、系統的に文法を頭でノートで整理し、構築して行くことが可能だが（そこには文法用語など日本語を介しての正に第２言語としての習得がある）、日本語もそれほど語彙やそれに伴

うイメージが豊富ではない児童にとってはBe動詞とか一般動詞とか、はたまた疑問詞や助動詞といった説明は、早くに英語嫌いを作る可能性もある。そういう意味で挑戦ではあったが、自分のことを表現したり、相手に質問してみたいと意欲を大切に進めることで一定の効果はあったように思われる。常にたくさんの文法的な間違いはあるけれども、繰り返し、訂正・練習していくことで、自然と身に付いていくかもしれないという手応えはあった。

３学期になり、文字を文として取り扱って行くことに決めた。というのは、いくつか理由はあるが、結局、教師側として中学の英語教育が目に入ってしまい、その先取りを考えてしまったということにある。また、リアド日本人学校は（他の日本人学校でもそうだと思うが）実用英語検定試験（英検）を教育課程の一環として取り入れており、小学校低学年でも５級取得者は珍しくなく、高学年にもなると、２級を取得する児童もいるという実態もあるからだ。当然、５級でも中学校１年生終了レベルの文法が文字として取り扱われているわけで、英文の読みも取り組まざるを得なくなったということである。

③実践してみての課題

初めての小学校における英語教育の実践で課題も明らかになってきた。まずは、扱う項目をどうするかということだ。単語を取り上げるにしても、表現を取り上げるにしてもそのある程度の範囲が必要になってくる。例えば、『身の回りのもの』や『自分のことを表現する動詞』、『相対する形容詞』、『頻度を表す副詞』などの単語、表現としては『一日の生活で使う表現』、『初対面の人とのあいさつ』などの考えられる。しっかりとした範囲を決定し、扱う言語教材をまとめておく必要があるだろう。

次に教材の選定・使い方も重要だ。教科書があるわけではないので、通常の授業となれば、やはり児童も意欲・興味・関心といった面で、どうしても飽きてくる場面があると言わざるを得ない。そこで、CD にしても、絵やカードにしても、教科書のようなワークシートのような存在を効果的に使っていく必要がある。特に音声教材、そして視覚教材はいくら英会話の授業とは言っても、母国語話者が教師である教室においては重要な教材である。

そして以上述べたように『取り扱う言語教材（単語や表現）の範囲』を決め、『それに適する視聴覚教材』を揃えても、一年間を通して、『何をいつ、どうやって教えていくかという見通し（当然であるが年間計画に当たるもの)』が必要不可欠になってくるのが明確になった。一方でこのように具体的に言語教材を決定すれば、気を付けないと、これまで国内で実践してきた中学校での英語実践と何ら変わらないものに陥りそうになる。根底に『興味・関心を損なうことなく、自然と英語を用いて簡単な表現ができるようにすること』を置いて、かつ自分のこの一年間を見直した実践を積み重ねていきたいと改めて感じた。

課題はこれだけではない。児童の英語能力の差が実は歴然と存在する。日本人学校の同じクラスには、海外生活が初めてで入学して間もない１年生もいれば、就学以前から現地で生活し、英語中心のプレスクール（幼稚園）に通い、英

会話のクラスを一年間積んだ２年生もいる。英語の授業を受けた経験がない日本の学校から転校して間もない３年生もいれば、英検準２級に合格した５年生も同じクラスだ。少人数であるがゆえに、会話の機会は増えるが、一方で個々人の差がはっきり見えてしまうという点も見落とせない。この学力差が、苦手＝英語嫌いにつながる可能性も否定できない。またこの中でも触れたが『実用英語検定試験（英検）』に合格させてあげたいというジレンマもある。年間３回、教育の一環として組み込まれていたので、児童英検・英検を必ず受ける環境にある。受けるからには子どもであるから合格したいし、良い結果を残したいと思っている。その期待にも応えてあげたいし、英検のための授業にならないようにバランスを取りながら楽しい授業でありたいと願っている。

小学校への英語教育の意図がどんなところにあるのかを考え、子どもたちがどんな英語能力や国際理解力を身につけ、中等教育、高等教育に取り込まれていくのが望ましいのかを見極めたい。

④国際理解教育としての英語

「将来、外国には行かないから英語は勉強しなくてもいいんです。」とは英語の興味・関心を損なってしまった中学生徒が口にするセリフだが、案外正解からそれほど遠くない。裏返せば、「日本国内には英語を必要とする環境がない」と言っているのと同じである。では、日本の子どもたちにとって、英語を勉強する必要性とは何なのか。国際理解（教育）である。世の中の現状を知り、最初は物事の善し悪しで判断しがちの差異に、何故そうなのか、その背景を考えることで、物事の善し悪しを超えた違いに気付き、認めることである。その有効な手段に英語教育は成り得ると考えられている。確認しておきたいことは、文部科学省が小学校学習指導要領の解説において、外国語活動の目標を掲げている。

● 外国語を通じて，言語や文化について体験的に理解を深め，積極的にコミュニ ケーションを図ろうとする態度の育成を図り，外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら，コミュニケーション能力の素地を養う。

当然ながら、小学校に英語教育の時間を設置するということは、英語を実際に用いて、コミュニケーションの能力を初等教育から図ろうとすることだが、小学校において大切なことは、言語や文化について理解を深めることであり、この意識無しに、ただ英語教育だけを導入しようとすれば、前述したような現在と同じ問題を抱えてしまうと思う。その上で、英語活動を行っていく必要を訴えており、具体的に子どもたちが意識できるかどうかは別にしても、言語材料を扱う教師側には常に求められるものである。広い視野を持ち、異文化を理解するとともに、異なる文化を持った人々と共に生きていく資質や能力の育成を図ること、それを自分の中の日本にフィードバックすることで、日本を見つめ直す機会とし、自己の確立を図ることにつながっていく。

日本人学校で、児童を対象に英語教育を実践

したことで、このことを実感したことも事実だ。特に、サウジアラビアという大きく違う文化や生活の中で、英語教育を通しながら、日本を感じたことは不思議で有意義な体験だった。

⑤英語教育の実践とこれから

この赴任期間を通して、自分の専門分野である英語教育に取り組む機会を得たことをうれしく思う。小学校における外国語（英語科）教育の導入が平成22年実施する方向で、さらにリアド日本人学校小学部にて、英会話の授業を実践できたことは貴重な体験だった。実践してみて、手応えもあり、今までの授業を振り返ることも多い。また、ここでは触れられなかったが、第２言語習得における母国語の役割について、思いを巡らすこともあった。そのことから、第２言語のどういう面が、子どもたちにとって魅力的であるのかを考えることが、意欲や関心につながるのではないかということも分かった。また、当然、世界各地それぞれの在外教育施設には、それぞれの現状があり、英語教育だけに限ってもそれぞれの実践があるということも自然と考えさせられた。

帰国してからの実践に、さらに試行錯誤を重ね、国際理解教育とともに、子どもたちのために、意欲や動機のきっかけになる授業を展開できればと思う。

３．現地理解教育

以上、リアド日本人学校での英語の授業実践について述べてきたが、ここでは、現地理解教育について振り返ってみようと思う。

サウジアラビアに赴任が決まったとき、公用語であるアラビア語もそうだが、イスラム教に興味を持ち始めた。というのは、数少ないサウジアラビアの書籍に目を通すと、サウジアラビアのことを理解するのに、イスラム教のことを避けては通れないと感じたからである。マッカ（メッカ）とマディーナ（メディナ）という２大イスラム聖地を抱える国で、国教がイスラム教の国で生活をしていくのである。赴任の前に本も何冊か読んだ。

世界ではキリスト教に次いで教徒が多い宗教でもある。日本は仏教の国ながら（語弊があるかもしれない）、実は無宗教に近く、そうであるのに、キリスト教（欧米の文化）の習慣も非常に多い。ところが、ユーラシア大陸の極東にあって、歴史の流れもあり、西洋の文化を取り入れているわけだが、その間には広大なイスラムの国が広がっているのを、世界を考える上で相当な日本人が無意識であるということは、公平さに欠ける気がしたからである。

世界どこの日本人学校においても、現地理解教育として、現地校との交流学習が主に置かれている在外教育施設も多いと思われるが、リアド日本人学校においては、現地校との交流が大変に難しい状況にある。

イスラムの教義により、サウジアラビアでは小学校から男女別学が実施されており、当然、男女共学の日本人学校の小学部との交流すら、簡単に実現できない。

そこで、リアド日本人学校は、小学校に就学する前の幼稚園との交流や、日本語学科を有するキングサウド国立大学との交流を行っている。もちろん、同学年との交流を実施したいという強い思いはあるが、前述した通り、サウジアラ

ビアの人と通常接する機会の少ない子どもたちにとっては、十分有意義な体験になっている。

その代わりというわけではないが、他のインター校の同世代と交流も行っている。赴任中では、韓国人学校、フレンチスクールとの交流を行った。はたまた同じ国内にあるジェッダ日本人学校とも交流を行い、遠く故郷を離れ、サウジアラビアで共に頑張っている異国・同郷の同世代の子どもたちと交流することは、子どもたちにとっても、また教師にとってもとても貴重な体験となっている。

修学旅行も含む宿泊体験学習では、最近、2008年７月に世界遺産に登録された「マダインサーレ遺跡」を訪れたり、紅海の海へと出掛けたり、標高 2,000m を超える山岳地帯「アブハ」の国立公園を散策したりと、サウジアラビアの歴史や自然に触れた。

また、現地には現地の習慣があり、ご存知のところでは、イスラム教徒は１日に５回の礼拝を行う。その間、街の店舗は全て閉店するため、休日に買い物に出掛けた子どもたちは日本とは違うリズムを体験することになる。他にもイスラム暦で９番目の月「ラマダーン」にはひと月に及ぶ断食が行われ、断食明けには花火も打ち上がるお祭り「イイド」が待っているし、12 番目の月には「ハッジ」＝大巡礼が行われ、世界各地からイスラムの巡礼者がサウジアラビアに集い、多かれ少なかれその光景を目にすることになる。

気候に関しても全く日本とは異なる。気温が50℃にも達する夏は、校庭で遊ぶこともままならず、涼しい冬になれば、広大な砂漠で遊ぶ機会もあり、その中でたくましく生きる動植物に触れることもある。

広く、多様性に満ちている世界を肌で感じ、これから先、そんな視点を持ちながら成長していく子どもたちを羨ましく、そして楽しみに思う。

４．おわりに（情報発信のススメ）

赴任に際して、非常に困った事に、現地の情報が手に入り難いという現状があった。国教をイスラム教とするサウジアラビアは、王制の専制君主制であり、自国が世界に対してどうこうと言うよりも、イスラムの教義にいかに忠実に生活できるかということが第一で、例えば、観光等はほとんど整備されていない。観光客の入国はほぼ許可されていない現状であり、当然、日本の書店にサウジアラビアの情報も、他の国に比べれば、皆無に近い。

何とか探し当てた本も、イスラム教に関する書籍が多く、サウジアラビアで日本人がどのように生活しているのかは書かれていない。

そのような経緯もあって、サウジアラビアでの３年間の生活を、これからサウジアラビアを訪れるであろう邦人に向けて、非常に個人的ではあるが、ウェブサイトを立ち上げ、サウジアラビアでの生活を綴ってきた。

サウジアラビアのことを記すにあたって、いい加減なことも書くわけにもいかず、いろいろな角度から物事を調べ、自分自身、考えるきっかけにもなったし、３年間を綴ることが最終的に有意義な毎日につながり、間違いなく研修にもなった。最後にこのサイトから、いくつか抜粋して、この実践記録を終わりにしたいと思う。

千夜一夜日記 1st Season

2005年４月６日（水）

第１夜「到着！サウジアラビア」

こんばんは。４月６日朝に成田空港を飛び立ちました。同じくドバイ、バーレーンに赴任する人と共に11時発のCathey Pacificで香港へ。香港で乗り継ぎ（ドバイ組と別れ)、バーレーン（バーレーン組と別れ)。そして、いよいよサウジアラビア王国首都リヤドのキング・ハリッド国際空港へ。

フライトの遅れもあって、夜の10時半に到着。しかし、ここからが長かった！検閲です。サウジアラビアはムスリム（イスラム教徒）の国。メッカという聖地も抱え、持ち込む物にはかなり厳しい審査が入る（アルコールは少量でも×。豚肉も×。女性の肌が露出している絵／写真も×（具体的にはセーラームーンもプリキュアも×)。麻薬系は死刑)。前に並んでた中国系の人は DVD を全て没収されていた（本人もあきらめていたので、内容はきっと H なもの？）その次の南アジア系の人は女の子の人形を２つ没収（イスラム教では偶像崇拝を禁じているので人形も×)。で、僕はというと海苔を説明するのに困った！赴任先のあいさつとして、奥さんが海苔を大量に用意したのだが、『これは何だ？』。説明しても首をかしげるばかり。最終的には何もなかったのだが時間がかかって、空港を出たのは夜中の12時近く。

ゲートを抜けると、日本人学校の職員の皆様が全員で出迎えてくれた。疲れも吹き飛ぶくらいうれしかった。明日から本格的にお仕事開始！頑張らなくてはっ！このサウジアラビアの生活でどんな人に出会えるか楽しみ☆

千夜一夜日記 1st Season

2005年８月２日（火）

第119夜「昼下がりのサラー（礼拝)」

夏休み、日直の仕事がほぼ終わり、午後４時前に池の魚にエサをやろうとした時でした。学校の警備員もヒマなのか、部屋から出てきて、一緒に魚にエサをやりました。その時、学校の向かいのモスクから礼拝の時間を伝える歌（アザーン）が流れてきました。

警備員が『昨日、逝去された国王へお祈りをみんなで捧げようと告げている』と言いました。僕はいつものアザーンとの違いはよく分かりませんでしたが、確かにいつもとは違って、リズムに乗れず、たどたどしく、いつもより長かった気がします。もう勤務時間終了直前だったので、落ち着かない彼に『帰っていいよ』と言うと、うなずいて、足早に向かいのモスクへ消えていきました。

昨日は国をあげて悼んでいる感じがしなかったけれど（それはちょっと残念な気がしました)、今日の昼下がりのサラーの時間はもの静かで、荘厳な感じがしました。傾きかけた西日が照りつけ、いつになく空が青くて、魚も静かに泳いでました。時間がゆっくりと流れて行きました。

僕は見れなかったけれど、テレビでは葬儀の様子が放送され、悲しんでいる国民の姿、そして埋葬されるところまで中継されたそうです。偶然にして、偉大なファハド国王が逝去されたその日に、ここサウジアラビアで生活していたことを、僕は忘れないでしょう。

p.s.僕の住んでいる集合住宅のゲートにはサウジ軍（ナショナルガード）が警備をしているのだけれど、今日はいつもよりチェックが厳しく、ゲートの前で10分ほど待たされました。

千夜一夜日記 2nd Season

2007 年９月４日（月）

第 478 夜「幻のスタバ・マーク」

今日はいつか紹介しよう、紹介しようと思っていて、なかなか日の目を見ることがなかったこの写真。何を隠そう『スターバックス』のロゴです。アラビア語もさることながら、スタバのマークを見て下さいよぉ。

そう、普通なら上半身は裸の女性、下半身は魚、王冠に長い髪、その名も妖精『セイレーン』がモデルになっているスタバのマークですが、サウジアラビア（中東？）に最初スターバックスができたときはこのマークだったそうです。今は、どこの店舗も『セイレーン』のマークを使っているけれど、リヤドの数あるスタバの中で、この１カ所だけ未だに当時のマークを使っているのです（どこにあるかはナ・イ・シ・ョ）。

理由はもうお分かりですね？サウジアラビアはイスラム教の国。女性の肌は厳禁です。街中のポスターも雑誌の広告も未だに黒塗りされてたり、ぼかされてたり（まじめに）しますからねぇ。いくら絵とはいえ、いくら妖精とはいえ、『セイレーン』は胸が大きいですから、裸だし。このマークが使われていた当時は、店のマグカップも全てこのマークで、珍しいということで、お土産として人気だったという話も。今でもこのマークだったら良かったのに...。

千夜一夜日記 Extra

2008 年２月 25 日（月）

第 1012 夜「あなたが生まれた夜の月」

お誕生日おめでとう。
あなたの人生初めての誕生日。
2008 年２月 26 日火曜日。
お父さんは 2008 年２月 25 日月曜日の
サウジアラビアにいました。
お母さんが電話をくれました。
お父さんもあなたの顔をすぐに見たいです。
あなたが生まれたとき、
リヤドの東の空に月が浮かんでいました。
小樽の西の空にも
同じ月が浮かんでいたと思います。
だからお月さまは、あなたの誕生を見て、
あなたの誕生をお父さんに知らせようと、
日本の空から、サウジの空に来てくれました。
お誕生日おめでとう。
p.s. あなたが生まれた日のお父さんの夕飯は、
…マクドナルドでした。（単身赴任ゆえ）

【サウジアラビア通信（仮）】

千夜一夜日記（Arabian Nights’ Diary）

http://homepage.mac.com/jirona1107/riyadh/